

2. 腹づくりにおける勘違い、間違い.....

☆ポイント☆

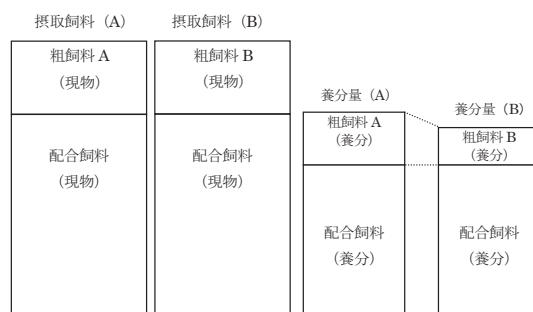
- 腹づくりと粗飼料多給の違い
- 栄養価のない粗飼料では腹づくりはできない
- 腹づくりは10ヵ月齢まで必要

腹づくりの失敗例で多いのが、粗飼料多給と腹づくりの勘違いがある。特に4～5ヵ月齢で粗飼料比率を30%食べさせて肋張りのある体型にするための良好な腹づくりは、良質乾草に十二分な栄養がなければ現実にはかなり難しい。

図26で見ると、左の摂取飼料のように粗飼料と配合飼料の食べた量は同じでも、粗飼料の品質の差から栄養的にAとBのように差がでる。育成期で陥りやすいのが、Bのような粗飼料の「嵩(かさ)」を食べていても栄養価(特にタンパク質)の低い粗飼料で腹を膨らましてもルーメンは発育できないばかりか、ばらの厚みやロース芯の発育にまで悪影響を与えかねない。「粗飼料を3kg食べているので腹ができています」等、粗飼料3kgの数値だけが一人歩きして、牛がやせこけていないか注意が必要である。どの月齢においても牛をやせさせるような、たれ腹体型の「粗飼料多給」の腹づくりは根本的に間違いである。

また、腹づくり段階でのDGも大切である。増体が良すぎるような場合、例えばDG1.3kgを超え1.5kgのようなときには、配合飼料が多すぎて粗飼料不足が考えられるので、全体の給与バランスの確認が必要である。また個体ごとのばらつきがないか注意したいものである。

さらに問題なのは、腹づくりの時期に粗飼料よりも配合飼料に偏った育て方をすると、腹腔内脂肪は7～10ヵ月齢、筋間脂肪は9～12ヵ月齢が発育月齢であることから、余分な脂肪がサシではなく、かみ脂肪となったり、ロース芯が小さくなったりする等して枝肉格付C等級の増加などへの影響を及ぼしかねない。



粗飼料と配合飼料の給与量(摂取飼料)が同じでも、粗飼料の養分量の格差がAとBのように差があると、牛は同じ量食べていても発育に差がでる。
Bのような粗飼料の嵩(かさ)を食べていても、栄養面特にタンパク質が不足するようでは腹づくりはできなくなり、発育の低下につながる。

図26 飼料摂取量と養分量の関係(良質粗飼料Aと粗悪粗飼料Bの栄養)